

育児講習会「性教育ってむづかしい？」 平成14年10月24日
講師：安達 倭雅子氏（人間と性教育研究協議会幹事）
於 高井戸保健センター

今日は性教育といいますが、子供と性の話をしたいと思います。
今日のように小さい年令のお子さんをお持ちのお母さんたちと性の話をするのが、一番気が楽なのです。なぜなら手遅れでないからです。
日本ではあまり言われていませんが、世界の性教育の趨勢、日本でも性教育を考えている人たちの一部の方は言っていますが、小学校3年までに基礎を教えないと、どうにも役に立たないのです。今の文科省の方針ですと、早くて小学校の4年生、遅いと5年生から始めることとなります。そうすると大変やりにくいといいますが、手遅れ状態が見えてきます。

「3つや5つの子に性教育なんてとんでもない。」と言う方もいますし、小学校のPTAのお勉強会なんかで性について話をする時、PTAの役員さんは上級生の6年生のお母さんが多いのですが、上級生のお母さんにとっては聞きたい話ですけれど、1年生や2年生のお母さんは「ごめんなさい。」と言われるのです。「でもすぐ5、6年になりますから、聞いておいてください。」とご挨拶があるのですが、その後でお話する私にとっては話を繋ぎ難くなってしまうことがあります。

みなさんのお子さんは、3歳から5歳ぐらいだと、係りの方が教えて下さいましたが、性教育をまだしていないと思っている方が多いと思います。ところが良い悪いは別ですがもうちゃんとやっけていらっしやいます。

まずどのあたりから性教育が始まるかといいますが、生まれて名前をつける時からもう性教育は始まっているのです。女の子の名前、男の子の名前、男の子はなんか強そうで偉そうで素早しっこそうな名前をつけ、女の子には耳障りの良さそうな、弱そうな、言うこと聞きそうな名前をつけてしまいます。日本では“美しい”という字が大変女の子の名前に好かれます。ご自分、お子さんあるいはお姉さん、お姑さんを含めて、身の周りの女の人で、“美”と名前がついている人を知っている人は手をあげて下さい。だいたい4割ぐらいですね。この“美”という字は、男の方でもついている人がいます。先般、亡くなったTBSのアナウンサーで、“林よしお”という人がいました。“美”という字に“雄”と書いて“よしお”さんでしたが、この方は、たぶんお父さんは、“自らの為に、美しく輝いて良い男になれよ”と思って名前をつけたと思います。ところが女の人にこの美の文字がついた時、なんとなく美しい娘になって“良い男を引っ掛けるよ”みたいな、品は良くないですが何かそんなニュアンスがただよいませんか。

“めぐむ(恵)”という字は、男も女もつけます、女には“恵子”さんとか“恵”とかいらっしやいます。男には、これは古くは“木下恵介”とか“小淵恵三”とかいます。男の人のニュアンスでは“恵んでやる男”、女の人で

は“恵まれる女”、そのニュアンスの違いからも男女の性教育が始まっていると思います。

名前の次は衣類です。最近では色彩感覚が個性的な方がいまして、赤いセーターの男の子とか、黒いジャケットの女の子とか、見るのに不自由はしなくなってきましたが、こういう色彩教育は、親だけがするわけではなく世間がするのです。たとえば皆さんが、お連れ合いに、「忙しいのに悪いけれど、上司の所に赤ちゃんが生まれたので、お祝いを届けてくれないか」と言われたとすると、皆さんは必ず「ぼっちゃん」か「お嬢さん」かとたずねて、そこで性と色が結びついてしまいます。自分の子供には自分の感覚だけれども、夫の出世が絡んでいると社会通念の色で性を律する。

ご自宅にお客さんがおいでになって、小さい子供にお土産があるとしましょう、ここでも強烈な性教育をしています。私は娘が二人、弟は男の子が二人います。弟のお嫁さんが「何で人んちの子に、人殺しの道具なんかくれるのよ。」と怒っているから、「どうしたの。」とたずねたらピストルと刀がお土産だったのです。「今頃、こんなもの持っているのはヤアさんだけだ。」と怒っているのですが、これは男の子の攻撃性を許容しています。女の子が頂いた衣類を考えてみると、刺繍が付いたりヒラヒラが付いていたり、“これが女だ”みたいなイメージになるわけです。

気をつけていると保育園の先生や幼稚園の先生も、こともなげに性教育をしてくださるなあと思います、活発な女の子がショートパンツを穿いて幼稚園に行っても「いけない。」とは言いませんが、ちょっと事情があって、その日はヒラヒラのものを着ていくと、先生が「かわいい。」なんて言ってくださる。これがだんだん社会通念の中で性教育が始まっていくということだろうと思います。

私は高田馬場の商店街から神田川の方へ、だらだらと坂を下った所に住んでいます。私は体にいろいろ弱い所があり、視力にとっても問題があって手術もしましたけれど、人工光線では物を長く見ると具合が悪く、やはり天然光線がいちばん良いのです。物を書くとか読む時は、窓際へ机を持って行きそこで仕事をすることが多いのです。窓の外は道路で、どうも私の家の所は表通りで、良い子でなかった子がお母さんに叱られる所みたいなのです。「パシッ」「ワァー」と、よく聞こえてきます。お母さんはわけの分からないことを言うものだと感じる事が度々です。「パシッ」「ワァー」「なぜ泣くの」、「それはご自分がぶったからよ。」と言いたくなります、親は不条理なことをたびたび口走るものですよ。

私たち親は、「もう三つのくせに。」と言ったはずなのに「まだ三つのくせに。」と、「もう」と「まだ」を30秒ぐらいで連発します。親って面白いものだと思います。「パシッ」、「ワァー」と子が泣き、そうするとお母さんが、「男のくせに、泣くのじゃない。」と言います。これは、立派な性教育です。「パシッ」としても泣かないので褒められるかと思ったら、「女の子のくせにぶっても泣かない。」、そこでめそめそする女とか、泣いて解決しようとする

女とか、ぐっと堪えて、泣いてもいい時に泣かないで涙を隠す男とか、両方とも妙なものだと思います。

そういうふうには性教育はどんどん出来上がっていきます。そうすると幼稚園や保育園の頃になると、ピンクは女色、ブルーは男色になっていく、色彩でも性は色づけられていくことになります。諸処方々に、そういう性教育があるわけです。

私たちは子供たちに性的な質問をされることに、どう対応するかということが頭に浮かんで来ることが多いのです。ですけど、子供と性を語る基盤に“どう語るか”“いつ語るか”よりも“なぜ語るのか”を理解することがまずスタートの基礎になると思います。

こういう経験はないでしょうか、口を利き始めた1歳ちょっとぐらいのお子さんを抱いて、人が大勢いるデパートとか、スーパーに行くと、この子よりちょっと小さい子、つまり生まれて3ヶ月とか、明らかにこの子より小さい子を連れた方がいると、この子がすごく懐かしそうに強烈に「赤ちゃん、赤ちゃん。」と言ったご経験はないでしょうか。

私は高田馬場で、地下鉄の東西線が出来る頃に子育てをしたのです。もう40年前の話ですが、地下鉄が出来た町の子育ての特徴は何かご存知ですか、乳母車が使えないことです、街中掘り返しているのですから乳母車で外出すれば乳母車ごと抱えて町中を歩かなければいけないので、抱くか背負うかです。とても不思議だと自分でも思うのですが、私は小さい女ですが、どういうわけかモータリツに大きい子が生まれるのです。信じられないけれど、長女なんて4,200gで生まれたわけです。よく大きく生まれた子はそんなに大きくなならない、小さい子はずんずん大きくなると言われますが、うちは大きく生まれて大きく育ったのです。今は160cm、50kg位のごく普通の女の人ですけど、3ヶ月検診の時8,500gありました。今だったら、さしずめ保健婦さんから食べ物のコントロールの指導を受けて、「飲ませ過ぎているのじゃないですか」と言われます。しかしその頃は、大きければ大きいほど良いベビーといわれた時代です。高度成長期でたくさんミルクを消費しなさいという時代だったのだと思います。どんどん大きくなって、10数キロになるまで歩かなかったのです。

私は太っていますけれど背丈が小さい、10数キロの子を抱えて町を歩くしかありませんでした。キャベツを半分に切って売るとか、白菜を半分に切って売るとか、あれは東京の都心といえどもここ20年ぐらいに始まったことでして、40年ぐらい前は、白菜なんて3つぐらい縄で括ってありました。そうやって歩いていると「赤ちゃん、赤ちゃん。」と抱かれた子が自分より小さな子をさして言うわけです。「何言っているの、あんただって赤ちゃんよ。」と思いながら、はっと気がついたのです。この子は生きていく摂理というか、自然に自分が少し前、あの小さな赤ちゃんだったのだということが分かる。だから熱心に懐かしそうに、「赤ちゃん、赤ちゃん。」と言うのだ。するとこの子がもっと大きくなって、頭が回るようになって「その子はどこから来たの。」「私はどこから来たの。」「なぜこの家にいるの。」「なぜこの家の子なの。」とか、

もっと大きくなるとお母さんから生まれて、お母さんに似るのは分かるけど、なぜお父さんにも似るかという命のからくりを必ず聞くと、自分の生きる磁場と言いますか、生きる基礎を作る、(セクシャルアイデンティティーと言っていいと思いますけれど)それを作る基盤が必ず必要になる、それが生きる力や問題解決能力の源です。非常に重要な生きるための要素だと思います。

セクシャルアイデンティティーがしっかりしていなくて具合の悪い人の代表的な方が、中国残留孤児だと思います。何処でどういう事情で生まれたのか、もっときつい場合は歳が分からないわけです。新聞などには、敗戦当時推定年齢3歳とか書いてあります。戦争が終わって50数年経つのにまだ日本に来るのは、中国が住みにくい国という理由ではない。中国は日本よりはるかに元気で、はるかに希望が持てる国だと私は思います。残留孤児の方々の殆どは向こうで安定した生活をしていて、お子さんもいらしてお孫さんもいるのに、なぜ今なお日本を訪ねるかと言いますと、自分が誰か分からないからなのです、つまりセクシャルアイデンティティーが不安定なのです。

皆さんは自分の歳をご存知で、どういう事情で生まれたかも分かっていますよね。今日の皆さんの髪型とかお洋服とかお化粧品とか、無意識であってもセクシャルアイデンティティーの上で、これでいいだろうと手を打っているわけで、セクシャルアイデンティティーは非常に重要なことです。私なんか小さいから身につまされます。私が中国で小さなころ迷子になったとします、中国の方が私を見て、「この子小さいし言葉もできないし、3歳かな」と推定されたとします。これは虐待の新聞記事でも時々出ていて、私たちは悲しい思いをするのですけれど、子供は子育ての環境が悪いと本当に発達しないもので、新聞に「本当は5歳なのに2歳ぐらいの体にしかなくなっていなかった」と書いてあることがあります。私も中国でよくない状態であったらとても小さくて言葉も遅れていてボーとしていて、中国の方は3歳と言ったけれど本当は5歳かもしれない、6歳かもしれない。私は今65歳だと思って生きているわけで、これが68歳だとなるとやっぱり私の幕を閉める時はいつだとか、プラプラ動くイヤリングはもう辞めたほうが良いのではないとか、皆さんだって今の歳より3つ若いとすれば、もう一花どうかしらと、すぐ夢見るかもしれないですよ。これがセクシャルアイデンティティーです。

だから、子供が「赤ちゃんって、どこから生まれるの。」「どうやって作るの。」と聞くのは、生きるための切実な、自分の立つべき場所を築くための命がけの質問だと思ってください。その子の人生をその子が構築するための非常に大切な質問です。しかし「これ何。」「時計よ。」と、生きるために時計という物を知らなければいけない。子供が、「これ何。」「時計よ、時間を計るのよ。」というのは何でもないことです。ところが子供が「赤ちゃんって、どこから生まれるの。」とか「赤ちゃんって、どうやってつくるの。」という質問にはおとなは事情が違ってとまどうのです。子どもは「赤ちゃんは、どうやって作るの。」と、まさか性行為なんてややこしいものがあるなんて、夢つゆ知らずに聞いてくるわけです。私は“野の花の名を聞く如く”と言うのです

けど、聞く子どもには他意はないのです。ところが答える方は大変です。なまじに性行為の持っているオドロドロしさとか、人には言えないこととか、いっぱい知っているから言えないのです。時計と違って性的な質問は、聞く方と答える方の水位が違うということです。子供は自分が3歳なら3歳の5歳なら5歳の人生を構築するためにこの質問をしているのです。これを逃がすわけにはいかない、答えなければいけないと思います。

大変答え難いので、普通私たちはいろいろな手を打ちます。まず叱るという方がいると思います。「そんなこと聞くものじゃない。」これは、子供にしたら積極的に生きようとする姿勢を否定されたことになります。「あんたなんか、どうでもいい。」「死んでもいい。」とか「あんたなんか、いらぬ。」と非常に辛らつなメッセージを受け取ったのと同じだと覚悟しなければいけないと思います。

ごまかすということをしていませんか。テレビの生理用ナプキンのコマーシャルなんか「お母さん、これ何。」と子どもがたずねる。「あら、雨。」と。子どもには「あの人はごまかす女だ」という結果が残るのです、聞こえないふりをなさいませんか、私の従妹は、お皿を洗っていると「ただいま。」と帰ってきた小一の息子に「お母さん、セックスって何。」ってたずねられました「来た!」、ずっとお皿を洗っていた。なかなか相手は向こうに行かない。そのうちあきらめて行ってしまった。従妹は、「私は何も言わなかったから彼は、まっさらよね。」と言ったのです。私は「お母さんは、時と場合によっては聞こえないふりをする当てにならない女だ」という評価は残ったかもしれない」と答えました。

嘘というのは“いけない。いけない”といますが、その場しのぎになるので「赤ちゃんは、何処から来るの?」「キャベツよ。」まだ「コウノトリよ。」という人が千代田城の方にいますがあれは冗談です。カラスがスズメを追い散らしているような、東京でコウノトリなんて言われたら子どもは恐怖です。キャベツなんて言ったら「どのキャベツ。」と言われますよ。やっぱり本当が良いということです、しかし今言ったどれよりも、いけない対応が一つあり、それは何か。「赤ちゃんって、どうやって作るの。」「あら良い質問、でもそれはあなたがもう少し大きくなると、自然に分かるの。」これは最悪の対応です。なぜか「いま何時。」「10時35分。」「ありがとうございます。」これで良いわけです。「いま何時ですか。」「安達さん、明日の朝午前3時。」と言われたら、そういう人とお付き合いをなさいますか。だから彼ら彼女らは、今の今自分なりにものを考えているところから聞いているのだから、今の今、答えなければならぬということを覚悟しなければならぬと思います。

子どもたちというのは、出し抜けに聞くのです。「お母さんこれから、お答えになりにくいことを聞くのですが、心の準備はいかがですか。」なんてご挨拶はないし、言ってもらいたくない真っ最中に、たずねることがあるのです。というのは、みなさんは核家族でしょうか、そうするとお連れ合いのご両親は遠くに住んでいて、たまにお見えになった時は、お嫁さんの立場としたら大変

です。

一生懸命お料理を準備して、普段ならば子供に「食べなさい。」と言うのに、大切なご両親ですから「お口に合いますかどうか。」など言うと、子供は気色が悪いのです。何だか気まずい雰囲気が出て、子供は何とかこの場を救わなければいけないと思う。すると「セックスって何。」とか言い出す、一番言ってもらいたくない時に言う、これは宿命なのです。

しかし子供がとんでもない過激なと言ってもいい質問をしてきた時に、「いつどこで、そう思ったの」「どんな時、それ聞いたの。」というような問い返しが非常にパワーのある対応になります。「むずかしさ」をクリアすることと言えます。

私が“子ども110番”にいた時に、男の相談員の方が「安達さん、ちょっと来てください。すごく過激な質問なのです。」小学校3年生なのに、「赤ちゃんの作り方、教えてください。いますぐ作りたい。」と言っているというのです。とうとう小学校の3年生が「子供を作りたい。」と言うような世の中になったのかと言うから、「いつどこでそう思ったの。」と聞いてごらんなさいと言ったら、実にすてきな返事が返ってきたのです。今日、図工の時間に先生がいろんな素材を与えて、「好きなものを作りなさい。」と言われ、その子は赤ちゃんを作りました。「一生懸命作って、しかしこの赤ちゃんは動きもしないし泣きもしない。これは正式な作り方じゃない、正式な作り方を教えてください。」これはすごい洞察力です。

私自身、その時に「まいったな。」と思ったのは、私は戦争中、人形なんか無かった時代の子供だったので、母がボロ布で人形を作ってくれて、しょっちゅうそれを背負ったりして遊んでいたのですが、それは焼夷弾で燃えてしまいました。私がピーピー泣くので、母はとうとうボロ布もなく次に新聞紙をのりで固めて人形を作ってくれた。母にあんなに苦労させて作らせたのに、「この赤ちゃんは、いつまで経ってもぜんぜん動かない。正式な作り方は。」なんて全然思いませんでした。それを思う子供はすてきでしょう。それが分かったと、話してあげたくなるわけで、「いつどこで、そう思ったの。」というのは、本当にパワーがあります。使いでのある台詞です、子どもの事情がおとくに伝わるのです。

「お母さん、接吻って甘いの。」と1年生が聞いて来ました。1年生でこんなこと言うのだから、中学生になったらどんな不良になるのかとお母さんは思ったそうです。ところがお母さんは、「いつそう思ったの、何処でそう思ったの、誰に聞いたの。」と聞いたのです。するとこれがまた傑作で、節分が来て、豆を美味しいと思わなかった。電車の中刷りを見ていたら、“接吻”と書いてあった。何でそれが読めたかというのと、“接”の字は当用漢字ですが、“吻”の字は当用漢字でないですから、そういうものを一般の新聞とか週刊誌に載せる時は、かなをつけなければいけない。だから“せっぷん”と書いてあった。“接吻”は“節分”とよく似ている。節分の豆は美味しくなかったけれど、接吻の豆はお砂糖でもついていて美味しいのかな、それならそう言っ

てくれればいいのですが、いつの間にか不思議なことに「接吻は甘いのか？」に。これが分かれば「ハハハ」ということになるのです。つい最近「シクラメンがぼつぼつでてきたわね。」と言ったら、4歳の私の孫娘が「どんなラーメン。」と言ったのです。私たちは“シクラメン”というものにイメージを持っている、ところが“シクラメン”を知らない4歳児には“ラーメン”の一種だととれるわけです。こんな事情からも子供たちの質問が過激になることがあるのです。

「いつ、どこでそうおもったの。」これに次ぐおとなと子どものやりとりは、冬に自動車を運転する時の、アイドリングによく似ています。

ある時、こんなことがありました。「お父さんもお母さんも分からないことを尋ねていいでしょうか、小学校の2年生です。」「そんな難しいこと、分かるかどうか分からないけど、ダメ元と思って質問してみてね。」と言ったら、「赤ちゃんの作り方を教えてください。」「お父さんに聞いたの。」「はい」お父さんに聞いたら、「男だから、分かんない。」「お母さんは女だから、知っているかもしれないから聞きなさい。」似たもの夫婦とはよく言ったものです。お母さんに「赤ちゃんの作り方、教えて下さい。」とたずねた。すると「あら、さて何だったかしら、あなたが生まれて8年くらい作っていないから、赤ちゃんをどうやって作るか忘れた。」と言ったそうです。

アップルパイなら8年作らなければ、バターはどうだったかしらとかレシピは忘れてしまうけれど、そういう逃げ方はブラックユ-モアより怖いのです。「赤ちゃん、どうやって作るの。」「デパートで買うのよ、あなただってデパートで買ったのよ、良い子しない子は不良品だって戻しますよ。」って、これはブラックユ-モアを通り越して怖い話だと思うのです。

学校の先生もなかなかやるなあと思いました。電話で一年生に聞いた話です。「先生、赤ちゃんの作り方教えて。」1年生が言ったのです。先生は「いい質問ですね、教えてあげたいのだけど、だってそれは教えられないのよ、人それぞれ違うの。」と答えたというのです。だからどう違うのか聞きたいです。みなさんも工夫して逃げていませんか。

「赤ちゃんは、何処から生まれるの。」「頭から。」これは落語にあります。「赤ちゃんは、何処から生まれるの。」これは私たち知らないわけじゃないです。女の人のおシッコする所とウンチをする所の間に膣口というところがあります。膣というトンネルにつながり、膣は赤ちゃんの住む子宮とつながるトンネルです。膣を通して膣口から生まれるのが赤ちゃんには一番生まれやすいし、お母さんも一番生みやすい場所です。これだけでは100点は上げられません。帝王切開は非常に減っていますが、今なお数%と言われています。だから数は少ないけれど、赤ちゃんが膣口から出難い時は、お医者さんが、お母さんと赤ちゃんの命を守るために、痛くないように注射をして、お腹を切って生まれることもあります。でもどちらの方法で生まれても、命の尊さは同じ、どちらも大切な命だということまで話せると、だいたい100点だろうと思います。

実はこの程度の嘘というものがこんなに大きな傷になるのかと自分でびっくりしたことがあるのです。今は石原都知事になり、その政策の下でなくなりましたが、石原都知事以前“狭山青年の家”という所で“からだ探検隊”という、いってみれば中身は性教育なのですが、勉強会を小学校1年生から3年生までに、手遅れにならないよう、2泊3日の春休みの合宿勉強を私はお手伝いしていたのです。きちんとお風呂に入ったかしら、ご飯はきちんと食べているかというようなことは、人数の少ない大人では管理できませんから、ボランティアのお兄さんやお姉さん、大半は教育学部の学生さんでしたけれど、子供たち40人ぐらいに対して20人ほど来てもらい生活を見てもらっていました。

そういうお兄さんお姉さんたちも子供たちに混じって一緒に勉強するのですけれど、事前にどういうことをするか勉強してもらおう、事前にたくさん勉強するわけです。

子供たちに本当のことを言うことは、すごく神経をナイーブにして考えていかないと、数の論理で、ある少数者を無視するような考え方では駄目ですよ。たとえば、思春期になると男と女が惹きあうなんて、ぬけっと言っちゃ駄目なのです。それは100人中95人で、あとの5人はホモセクシャルの人もいれば、バイセクシャルの人もいればいろんな人がいるのだから、だから“赤ちゃんは、何処から生まれる”という時に、膣だけじゃなくて帝王切開もあることを伝えなければならないでしょう。

「この学生さんの中にだって、帝王切開で生まれた人いるでしょう。」と言ったら、「は～い」と手を上げた人がいました。それは立教大学4年生の男の人でした。ちょうど教育実習で和歌山の実家の方へ出身校から、教育実習に入ってくださいという連絡が来ました、お母さんが携帯電話に連絡を入れ、学生さんは勉強中にそれを受けたわけです。彼は出産についての勉強をしていたところでしたから、お母さんに「僕は、帝王切開で生まれたんだよね。」と言った。すると「何ばか言っているの。」とお母さんは電話を切ったらしい、「すごくショックだった。」と言って頭を抱えているのです。「おかんの奴。」と言うのですが、お母さんのことを関西では“おかん”というのです。「おかんの奴、嘘つきやがった。」「何処から、生まれたのだ。」と幼稚園のときに聞いた時、「腹を切って、生まれた。」と、そういえばお袋のお腹には傷はなかったけれど、それに気づかない私も悪いけれど、ずっとそう思ってきた。それが自分の中核にあって、それが自分の原点だった、これが揺らぐのは非常にショックだと真顔で怒っているのです。周りはみんな慰めているのです。「いいじゃあないか、お母さんの気持ちも分かるし、お前に限ってわんぱくだったろうから、お母さんに見てみたら、お腹を切って生んであげたのだから、いい子にしてよ、というメッセージで嘘をついたのだから、そんなに気にすることないよ。」と、みんなが一生懸命慰めているのに、私が「へえ、そんなにショックなのかしら。」と思うくらい鬱々としているのです。「僕の基盤が揺らぐのだ。」と、だからお腹が割れて生まれるとか、切ったとかいう嘘は意外と人格そのものを脅かすのだと、私は彼を見てびっくりしたのです。「いい年

をして。」と言いますと彼に失礼ですけど、大学4年生で教育実習に行こうかという年令の人が親の嘘にこんなになって揺れているということは、すごいことだと思いました。

子供たちは「赤ちゃんは何処から生まれるのですか。」と場所を聞いてくるのではなくて、なぜか、なぜ生まれられることになるのか、つまり大人の言葉でいうと生命が呼び出される可能性を聞いてくることが多いのです。なぜ赤ちゃんは生まれられるのか、それはおそらく、いろいろなお友達の家で子どもの数がそれぞれ違って、どうしてあそこの家は一人でうちは二人で、隣は3人兄弟なのかを疑問に思ったりするところからの発問でしょう。

そのような時の答え方で、私が「いいなあ。」と思っているのがあります。赤ちゃんはお父さんになりたいと思う人と、お母さんになりたいと思う人と、あるいはもう一人子供が欲しいと思う女と男がいて生まれてくるのです。結婚している人が一番多いわけですが、結婚とか愛というものは性教育の中ではあまり語る必要がないのです。愛しているから生まれるというのは大変で、不妊症の方なんかは愛していないのでしょうか。“愛しているだけで生まれる”これから私が誰かを愛すると、生まれたりするかどうか、これは生まれません。愛というのは抽象的な概念です。結婚しているからというのは、今は相当小さい子が“出来ちゃった結婚”なんて言葉を知っています。5年生や6年生になると、結婚すると子供が生まれるという嘘はすぐ見破る。

結婚制度はいつ頃出来たと思いますか、われわれ庶民には明治からです。“たらちね”という落語を聞いていると、日暮れになると大家さんが女の人を連れてきて、「やあ」と言ってそれで終わりです。結婚届なんてない。石器時代に結婚届なんてない。その時も男と女の性交があって今に生命がつながっているというのは5、6年になると分かります。結婚の中だけで子どもが生まれると言うとモラルの上ではいいようなカッコがついたような気がしますが、その、おとなに都合のよい嘘は子どもにすぐ見抜かれてしまいます、そんなおとなの話は子どもが信用しないのです。

気に入る合い尊敬しあっている人が、お互いの子供を作ろうね、欲しいね、相談がまとまると、いつもと違う特別の方法で性交すると言います。いつものこの国のスタンダードな性交は避妊をしているのが事実です。避妊をしない性交は非常に数少ない。これだけのことがきちんと位置づけられていないので、学校教育の“赤ちゃん誕生”にかかわる性交を教える場合は実にお粗末です。もっとも性交を扱わない学校が殆どですが、扱いますから見に来て下さいなんて、「卵子と精子があります。これが合体しないと命になりません。合体することを性交と言います。はい、みなさん大きな声で、性交。」これで終わるのもあります。

「性の絵本」という名前の本が大月書店から出ています。私が5巻目を担当しているのですが、1巻目から4巻目までの編集会議にももちろん私も出ました。大変ヒットしている本で、その中に子供たちの目に、非常に好ましいといわれている性交の絵があります。大変に綺麗で、かなりの学校の先生がコピー

を授業に使っています。「はい、これを見てください。これが性交です。ありがたいて思って下さい。お父さんとお母さんはあなた方を作るために、こんなことまでしてくださったのよ。」とこんな具合です。だから子供たちは電話で、「高校3年生なのですけど、いいでしょうか。」「相談員さんは結婚していらっしゃいますか。」「しています。」「お子さんは。」「2人。」「お前、2回したな。」と言うのです。「そんなことない。」「嘘つくな野郎。」「ちょっと待ってね、あなたの為に数えておけばよかったけど、数え切れなくらい沢山性交したわよ。」「ありがとうございます。そう言ってくださる大人に会いたかっただけです、どうも、お忙しいところ失礼しました。」と電話は切れしました。学校の先生は、自分で性教育しながら「じゃあ、先生はお子さんが3人いるから、3回したのだね。」と言われて立ち往生するのでしょうか。気に入りが合っているカップルは、人間の場合、繰り返し性行為を持つものだという事を前提に喋らなければいけないのです。子供を生むということは、また別のことなのだという事を後で語れる隙間を作っておく必要があります、だからお父さんになりたい、お母さんになりたい、お互いの子供を作ろうねと、約束がまとまると、いつもと違った特別の方法で性交するのです。これが一番わかりやすいと思うのです。

気に入りが合っているカップルは、繰り返し性交を持つものだけれど、子どもが欲しくない時は欲しくない方法があり、それは避妊という言葉。望まない妊娠には中絶という緊急避難があるということ、少なくとも小学校の終わりごろまでに、きちんと教えることが、命というもののかけがえのなさを確信するきっかけになるわけです。

世界で性教育の一番進んでいる国はスウェーデンでしょう、小学校3年までにこれを教えます。避妊はどういうふうにするかというのは中学です。だから避妊があるということ、中絶はどういう危険性があるって、何週まで法的に可能かというようなことの学習はもっと先になって学習するのだけれど、どうしても生むことが出来ない時は、赤ちゃんに申し訳ないけれど、命になることを止めるという方法もあるのだということ、小学校3年生までに教える。これは小学校3年生たちみんなが、お父さんお母さんたちが欲しいと思ったから生まれることが出来たのだ。欲しくなかったら避妊ということもあるし、望まないのだったら中絶ということもある。望まれたという意味においてはみんな同じです。でも、お父さんとお母さんが喧嘩ばかりしているとか、別居しているとか、離婚したということがたとえあったとしても、仲良く暮らしているお父さんお母さんの子供と、望まれて生まれたという意味では、ここにいる子はみんな同じです。だからいじめていい子とか、死んじゃっていい子とか、自動車にぶつかっていい子とかいけませんよというために、この命のからくりを正確に教えるのです。

なぜ3年生か、小学校3年生ぐらいまでは自己中心で育て、3年生を過ぎると他者が見えてくる。性だけでなく子供たちの発達全般にそうなる段階で、この時に他者が見えてくるということ、簡単にいうと3年生はコンプレッ

クスを持つ年令だということです。幼稚園の運動会では、1等だろうが、2等だろうが、3等だろうが、みんなうれしそうに走っています。だけど小学校3年生を見ると、あの人は速い、自分はかけっこが遅いということくらい良く分かってくる。自分はその人よりここが劣っているとか、親の仲が悪いとか、親が乱暴であるということが、そろそろ本気で問題になるのが小学校3年生のころからです。その時期までに、自分の尊厳の確信を入れておいてやらないとバランスを失うということです。そこで、小学校3年生までに、スウェーデンではおおよそ語るわけです。いつもと違う方法で性交するといった時に「性交ってなあに。」と、すぐ聞く子供はそんなにいません。子どもはスパイラルに何度も性的なことを質問します。算数だって、国語だって、何度もやったでしょう。湯船で10数えてみましょうね、何回も10まで数えさせる。これを一体何度繰り返して子どもは数について確かなものを身に付けるのでしょうか。

私の長女は獣医なのですけれど、学生の際に初めて牛の出産に立ち会ってきたらしく、興奮して「今日、牛の難産に立ち会ったの。」と、私について歩くのです。私はうるさいのでお風呂に入ったのですが、お風呂のガラス戸の向こうにいて「それでね。」とか言って、「かんし分娩だったのよ。」偉そうに言うのです。牛のかんし分娩は足を荒縄で結わき、そこを学生が引っ張るのです。先生が「引っ張れ。」と言ったら、何人も引っ張るのですって。「ああ、そうか。」と思ったのですけれど、二十歳を過ぎて牛の出産を見たことで、自分が生まれたことと牛を合わせて、牛を自分だと思っているのではないけれど、それを母親である私と語り合いたいという、何度かスパイラルにということとはそこまで続くのです。

「性交って何か。」ということも早ければ小学校の低学年、そうでなくても中学生ぐらいまでに、性交について言語化したもの、つまり言葉で何か確かなものをもらうことが必要なのです、しかしこんなに必要だということに直面して私はびっくりしたのです。中学生や高校生に話をする時、さっきいいました、「赤ちゃんは、どうして生まれられことになるのだ。」というのを、「小学校1年生か2年生に話すように言うからね、あなた方はもう中学生なのだから、聞いてもしょうがないと思うかもしれないけど、基本的なことだから、小学校1年か2年の気分になって聞いてくれる。」と、さっき言ったくたぐたを話すと、「おお、そうだそうだ。そういう言い方もある。」「それで、あなた方はみんな大切なの。」と言うと、ぱっと花が咲いていくように、みんなが良い顔をするのです。それはこれについて語ってもらえなかった子どもが、空洞として持っているもののようです。高校生も、大学生も、この語りかけに見事に反応するのにびっくりしました。言葉で伝えるということは、大切だと言わざるを得ません。

性交については、こういうふうに言います。気に入っているカップル、たとえばお父さんとお母さんみたいに、仲の良い男と女のことを今日は考えてみようということでスタートします、これでは異性愛の人たちは100人中95人、あとの5人について話してないことになるけれど、まずはそこから話し始

めてよいでしょう。気に入り合っているカップルは、とても尊敬しあってやさしく声をかけ合う、やさしく体に触れ合う、そうして、この人たちにとってここは安心の場所、今からセックスするということは、とても二人にとって正しいこと、良いこと、正義だという場合に人間の性交は成り立ちます。男の人は耳と耳の間、視床下部という所、セックスというのは足と足の出来事ではなく、耳と耳の間の出来事だというのはそこが根拠です。性は殆どが脳みその仕事なのです。その脳みそが指令を出す、これは小学校3年生を過ぎると他者が見えるといいましたけれど、発達の中で性器を触るとか、ちょっと性的な刺激のあるものを見たり聞いたりすると、性的興奮があるという因果関係がつながりはじめている。簡単にいうと小学校1年生なんか「スケベ」とか言いますが、何のことか分からない、ただ親のリアクションがいいから叫んでいるだけなのです。しかし3年生を過ぎると、あの感覚はあれとつながっていることだと分かっているから、性器を触るとかエッチなこと考えると、同じようなことが起こることも伝えないわけにはいきません、耳と耳の間の脳みそが、性行為をする支度をしようと指令を出します。その指令が骨盤を通して全身に行き渡ります。そうすると骨盤の内側にたくさんの血液が集まって、その血液が男の人の場合、ペニスに流れ込むとペニスは長く大きくなって堅くなる。これが勃起で、男の人のスタンバイOKです。女の場合、言うのが面倒なくらい同じなのです。脳の刺激で骨盤に血液が集まり、もちろん女の人に、ペニスがあるのをご存じですね、陰核が男の子だったらペニスになるための部位です。ここが男の人の性感を得るメインスタジアムのように、ここが女の人の性感を得るメインスタジアムなのですが、男の人と違って狭苦しい所に、同じ数だけ神経がひしめいていますから、扱いが難しいのはそのことなのですが、クリトリス勃起というのもありますがこれは個人差があり気がつく人、気がつかない人もいる程度のことなので子どもには省いてよい部分でしょう。女の場合、骨盤の内側に集まった血液の中の水分が膣の壁ににじみ出す、これを汗のようにと言った人もいますが、膣の中には汗腺はありません。どこからにじみ出てくるかといいますと、細胞と細胞間の隙間から分泌があって膣が潤う、これが女の人が性行為をしてもいいというスタンバイOKのしるしです。きちんと欲するのは、残念ながら男の人の性的興奮には、勃起という呼び名がつきますが、女の人には言葉さえないことです。

私は大人のための電話を受けていてびっくりしたのですが、日本の結婚の中での夫婦の性行為なんて、場合によってはレイプまがいです。男の人が仕切るもので、男は女の人格を見ておらず、ここが大人同士の世界ですから言いますと、人格が出会っている性行為でなくて、なんだか妻の膣を使って自慰行為をしているような話が多くて、本当に情けないと思います。きちんと両方が整った時が人間の性交なのです。ペニスが膣に入り精子が飛び出し、お母さんのお腹の奥の卵管で卵子とドッキングすることが出来たら、受精というのだけれど、そこではとても面白いことが起きるのです。卵子は細胞で細胞核があり、精子細胞で細胞核があります。だから話をする時“一つの精子と卵

子”を、こっちからお饅頭が来てね、こっちからおせんべいが来てね、せんべい饅頭みたいのが出来るのが、人間だという説明が多いのです。それから、おじいちゃんからつながって、親からもらって子孫につながっていくと説明すると、私たちの命はつながりかということになります。

「そこで受精ということは、卵子の核と精子の核がとけ合って全く新しい生命の細胞が生まれるということです。つまり、お父さんとお母さんの子どもなんだけれど、お父さんでもお母さんでもないあなたが生まれる。それは地球上に今まで一度も現れたことのない、それからどんなに待っても二度と地球上に現れることのないあなた、かけがえのないあなたが生まれるってわけよ」こんな風に語れて、はじめて性教育は生命尊重の教育になり得るわけですし、こう語る以外に核心に触れる生命尊重の教育はないと思うのです。